

《宮内氏像》について

武井 敏

巻頭でも紹介したが、当館に萩原守衛の生前鑄造作品《宮内氏像》が昨年寄贈された。ここでは、この寄贈を記念して、モデルの宮内良助、制作エピソード等をあらためて紹介したい。

モデル・宮内良助について

宮内良助（図1、2）は、一八六九年（明治二年）四月二十日、下総



図1 宮内良助（37才）と長男 治良（6才）
撮影：明治38年8月



図2 宮内良助（37才）と長男 治良（6才）
撮影：明治38年11月5日

国柏井村（現千葉県市原市柏井町）の植草治左衛門とくらの三男として生れた。明治九年柏井小学校に入学。明治十六年小学校を卒業。この年の春ごろ、徴兵を逃れて宮内軍治（もとは植草治左衛門の養子、同年五月十五日死去）の養子となる。明治十七年頃、日本橋区田所町二十五番地で西洋小間物の製造卸問屋の植草屋を創業。明治二十七

年には店舗兼住宅を日本橋問屋街でも一等地と言われる通塩町の角地に移転。明治三十年代には帽子についても下職を抱える問屋へ、明治四十年頃には大きな資本力を持つ帽子問屋に成長。明治四十四年帝国制帽株式会社と特約店契約をする。大正三年夏頃、帝国制帽への支払い滞納により、担保であった土地・家屋を売却、浅草区左衛門町に転居。大正十二年関東大震災により左衛門町の店舗兼住宅が消失、一時神田和泉町の貸家を店舗とする。昭和四年、満六十歳を迎え隠居する。事業は若い頃コロンボで十年ほど商人として修業を積み帰国後は良助とともに店を切り盛りしてきた息子治良が受け継いだ。一九三五年（昭和十年）十一月二十四日没¹⁾。

制作の契機、制作時期、エピソード等

制作の契機は、萩原守衛の次兄・本十は東京で中折帽の付属品問屋を営み、商売上の付き合いから宮内良助との関係が始まり、彫像の注文につながったと考えられている。なお本十はこの作品に先立ち東京帽子商工会長の北條寅吉の像を弟・守衛に斡旋していた。

宮内良助が肖像彫刻を注文した動機は息子治良の妻コトによれば「銅像の制作年代につきましては（略）主人治良の口より義父が四十二歳の厄年に作られたと聞いております。尚怪しげな話でございますが、萩原氏によつて銅像を制作中、當時店に居りました一番々頭がなくなつたのことで、その折良助が片腕を失つたも同然だとひどく力を落し、銅像の片方の腕を落して貰つたと申すことでございます。」²⁾ということがあるが、正確なところは不明である。なお郡司美枝氏が指摘するように、宮内良助の事業は明治四十一年から五年間の間に急成長を遂げており「こうした拡大のなかで、良助は明治四二年に萩原本十の願いにより弟の碌山に胸像制作を依頼できたのであろう」³⁾。

制作時期については、像の右脇下に「宮内良助」「當時四十二才」、左肩後に「09 碌山」と萩原の自筆が刻まれていることから、一九〇九年の制作と考えられている。またおそらく本像の鑄造に関わる一九一〇年一月十五日付の山本安曇宛の葉書が残されている。萩原はすでに《北條虎吉像》の鑄造を山本に依頼したことがあった。葉書には「バストは隣の大工なり、臼井家なりに豫け置き店の方へ来てくれ玉へ⁴」とあり、鑄造された《宮内氏像》は隣の大工か臼井家に預けて店（新宿中村屋）に来てくれと告げていることから、一九一〇年一月十五日頃には鑄造が終わっていたと読み取ることができる。

制作にあたっては、巻頭でもふれたように、それに先立って油彩画《宮内氏像》(図3)が描かれた。「どうも宮内氏の人格がつかめないから作りやうがない。」と乗り気でなかった気持ちを整え、彫刻制作に向かわせるためであった(準備デッサンは残っていない。デッサンしたかどうかは不明)。萩原は「彫像なるものは外形の美の如きは抑々末で唯内部の生気を躍動せしむる事」と言っており、モデルの内面を把握することは制作の最も重要な点と考えていたのであった。

像の特徴は、萩原がロダンの「最大傑作⁷」とした《ジャン・ポール・ローランズ像》によく似ている。仁科惇氏が「(ローランズの肖像)



図3 萩原守衛《宮内氏像》
1909年

の構成が、そのままこの像に生かされている。肩から断ち切られた右腕、台坐のせり出し、人物のそり具合などにそれが窺える⁸。」と指摘する通りである。これは高村光太郎が言うように「ロダン

の影響は随分つよく、ロダンの『ダナイデ』―守衛の『デスベア』。『皿の上のヨハネの首』―『柳敬助の首』。『ゴロツキの首』―『小児の首』。まつたく同じやうなものを作つてゐるが、これはむしろ、若い真剣な魂が自然に行ふ『キリストの模倣』といふべき神聖なアスピレイションのあらはれと見るべきで、彼のためにはこれが大きなプラスとなつてゐる。』ということなのである⁹。

鑄造されたブロンズ像は萩原の意志で日英博覧会へ出品された。日英博覧会は日英同盟強化の観点から、明治四十三年五月十四日から十月二十九日にかけてロンドンのシェファーズブッシュで開催された。《宮内氏像》は「新美術之部」の「彫刻」の分野に品名「銅像 自作」として出品され、記念賞を受賞している。博覧会への出品は、明治四十二年五月六日に東京市内の美術家・美術工芸家を農商務省会議室に召集して勧誘が行われ、願書の提出期限を九月十五日とし、十二月五、六日に鑑査が行われた。しかし、彫刻の陳列予定数三十に対し鑑査を通ったのは二十点のみのため、不足が生じてしまった。そこで萩原は出品を要請され、それに応じたかたちで《宮内氏像》を出品したという¹⁰。博覧会は萩原の没後の開催であったため、ロンドンでの評判が萩原の耳に届くことはなかった。

なお、本像はこれまで以下の展覧会に出品されている。

- ① 『萩原守衛と日本の近代彫刻―ロダンの系譜』
(一九八五年四月六日～五月六日、埼玉県立近代美術館)¹¹
- ② 『日本近代彫塑入門 萩原守衛と朝倉文夫』
(一九九九年四月十七日～六月二十七日、徳島県立近代美術館)¹²
- ③ 『明治の彫塑 ラグーザと萩原碌山』
(二〇一〇年十月二十三日～十二月五日、東京藝術大学大学美術館)¹³

かつて高村光太郎はブロンズに鑄造された《坑夫》について「この首はブロンズになつてからの効果が大変よく¹⁴」と述べている。鑄造された《宮内氏像》を見て、荻原守衛、高村光太郎はどう感じたのだろうか。残念ながら、これに関する言葉は残っていない。とはいえ、《宮内氏像》は「モデルの魁偉な個性¹⁵」が伝わってくる優品であることは間違いない。

- 1 宮内良助の生涯については、郡司美枝『東京商人の生活と文化 宮内家三代の一五〇年』刀水書房、二〇一六年参照。
- 2 東京藝術大学石井教授研究室編『彫刻家荻原碌山』信濃教育会、昭和二十九年、一八一頁参照。
- 3 郡司、前掲書、六八頁参照。
- 4 『荻原守衛書簡集』碌山美術館、二〇一五年、三九七頁参照。
- 5 本多功「碌山の追憶」『彫刻家荻原碌山』（前掲書）、四六頁参照。
- 6 荻原守衛「欧洲美術界の趨勢」『荻原守衛日記・論説集』碌山美術館、二〇一八年、三七一頁参照。初出は、荻原守衛「欧洲美術界の趨勢」『江湖』第一年第四号、江湖社、明治四十一年、五六頁参照。
- 7 荻原守衛「ロタンと埃及彫刻」『荻原守衛日記・論説集』三三三頁参照。初出は、荻原守衛「ロタンと埃及彫刻」『早稲田文学』第三十一号、明治四十一年、金尾文淵堂、五八頁参照。
- 8 仁科惇『荻原碌山―その生の軌跡―』柳沢書苑、昭和五十二年、二一四頁参照。
- 9 高村光太郎「荻原守衛」『彫刻家荻原碌山』（前掲書）、一四頁参照。詳細については、郡司、前掲書、八八―九二頁参照。日英博覧会事務局編『日英博覧会新美術出品図録』（審美書院、明治四十三年）には、彫刻の最終頁に「第百一 銅像 荻原守衛」というキャプションとともに《宮内氏像》の写真が掲載されている。番号は全体の通し番号であり、第六十一から第百一までが彫刻である。
- 10 展覧会カタログには写真のみ掲載されている。『荻原守衛と日本の近代彫刻―ロタンの系譜』埼玉県立近代美術館、一九八五年、四八頁参照。
- 11 展覧会カタログでの《宮内氏像》への言及は『日本近代彫塑入門 荻原守衛と朝倉文夫』徳島県立近代美術館、一九九九年、一四頁および六一頁参照。図版は六八頁参照。
- 12 展覧会カタログでの《宮内氏像》への言及は『明治の彫塑 ラグーザと荻原碌山』芸大美術館ミュージアムショップ／（有）六文舎、二〇一〇年、四九頁参照。図版は二九頁参照。
- 13 高村光太郎、前掲書、七頁参照。
- 14 『彫刻家荻原守衛―芸術と生涯―』碌山美術館、二〇一八年、五八頁参照。